

胸の石碑

「人の世といふものは、美しい薔薇の花を、敷きつめた路ではない——これはあるフランスの、有名な文學者の云つた言葉です。ね、兼子さん、あたしは今日のお別れに、この言葉を残して行きます。ぜひあなたはこの音楽で心を養つて、いつも確かりした足取で、微笑みながらこの世の路を、歩いて行つて下さい。」

上

音楽の先生は満洲の學校へ赴任なさる時、兼子に向つて改まつた口誦でかう云つた。

兼子は學校でも、聲がいゝといふので評判であつた。學藝會ではいつも獨唱が喝采された。そのため音楽の先生は、兼子に一しほ眼をかけて、優しく導いて居られた。だから兼子にとつては、音楽の先生の印象は、だゞ優しいといふ



一字で充分云ひ表はすことが出来た。

けれど、いよくお別れといふ日に、特に兼子を一室に呼んで、しんみり云ひきかせた時の、先生の印象ばかりは、きびしく烈しく思はれた。それほど先生の言葉は、火のやうに力强かつた。胸を焼かれるやうな思ひがした。

「はい——」

兼子はそれだけしか云へなかつた。腋の下は、冷い汗でぐつしより濡れてゐた。——あたしに出来るでせうか。さうやつて、親切に仰有つて下さるのは有難いのですけれど、買ひ被つていらつしやるのではないでせうか。こんな想ひが、頭の中を往來した。

それでも聞き終つた時には、決して先生の言葉を無にしまいと思つた。さうした思ひをこめた返事が、

「はい——」といふ一言であつた。

兼子はそれから、ちらと窓の外へ眼をやつた。學校園の中で九月はじめの風に、ゆらゆら揺れてゐるコスモスが眼に映つた。

それから一月たつて、十月に入つてから先生は、異郷の空でたうとう亡くなつた。そして、先生の最後の言葉は、ほんとうの遺言になつてしまつた。といふよりも、兼子の胸の中で淋しい石碑となつてしまつた。

それでもこの石碑は、雨や風にうたれて、ぼろ／＼に崩れて行くやうな石碑ではなかつた。ます／＼固く、ます／＼鮮かになつて行く石碑であつた。

兼子は毎日きつと一度は、この石碑にお参りをした。いえ、お参りするといふのは、あの言葉を思ひ出すことであつた。思ひ出しては先生を偲んだ。偲べば偲ぶだけ先生のお心持が有難く思はれてならなかつた。

そんな時、兼子はぜひ勉強しなければならぬと、心に誓ひながら日記の筆をとつた。

「音楽、音楽——あたしの道は、これだけです。こればかりが、あたしの望です。慰めです。光です。」

こんな書き出しの、狂ほしいほどの愛着の文字が、筆の端からにじみ出た。そして暇さへあれば、楽譜を読んだり、長い間唄つたりした。ふいに鳴り出す歌時計の、オルゴールの歌を聞いても、壁にとまつて啼く蟋蟀の聲を聞いても兼子はいらくして、根かぎり、唄つて、唄つて、唄ひぬくのであつた。

その熱心のせいか、兼子の獨唱は非常に力強くなつた。一漂へる銀線のやうな森の梢を吹き過ぎる風のやうな、白い渚にうち上げる波のやうな、さうした變化に富んだ聲は、ますます洗練された。それでゐて疲れを知らなかつた。

下

けれどこの聲は、長く続かなかつた。先生に對する悲しみから、却つて奮ひ起つた兼子は、あまりに聲を使ひ過ぎたためであつたかも知れない。

「兼子さんは、あんまり悲しんだので、きつと、聲を泣きつぶしておしまひなつたのよ。」

「え、きつと、さうに異いなのわ、あんなに先生を慕つていらしたんですもの。」

學校では、こんなことが取沙汰された。皆は兼子の心を、おしはかつて同情した。そして、泣いて血を吐くと云はれてゐるほとゝぎすに譬へて、ほとゝぎすさんといふいゝ意味の仇名がついた。賞め讃えるためにつけた仇名は、學校でも恐らく兼子のが初めてであつた。皆はこの仇名を口にする時、悲しさうな

顔をした。そして早く療るやうに心から願つた。

五六日聲がつぶれたまゝで、兼子は通つた。けれど皆から同情され、ばされるだけ、兼子の心は辛かつた。それで學校を休んで、根本的に治療することにした。

「天分がない上に、かうして聲がつぶれてしまつては、もうあたしは駄目。」
雷氣を咽喉にかけて貰ふ治療が済んだ後で、ある日兼子は泣いてしまつた。あせつてはいけないと云つて、慰める醫者の聲も、白々しく聞えて仕方がなかつた。

音楽で心をおもひ食つていつも確かりした足取で微笑みながら、この世の路を歩けといふ先生の言葉も忘れてゐるのではなかつたが、どうしてこれが微笑まれよう。兼子はいつそ癒らないものなら、このまゝ癒らずにしまつて、言葉が出な

いやうになる方がいゝとまで思つた。

ある日兼子は、先生の四十九日にあたるので、飾つた寫眞の前に座つて、過ぎ去つたことなどを思つたり、これから先のことを考へたりした。けれど、音楽に對する暗い感が、つき纏つて離れなかつた。

幼い時見た一人の女。その女は秋雨が佗しく降つてゐる野道を、白い着物を着て水にぬれた冷飯草履を穿いて、びしやく歩いてゐた。

その淋しい姿が、何故かしら思ひ出されて來た——音楽から離れてしまへばきつとあんな姿で、人の世の路をとぼく歩かなくてはならない。そんなことが思はれて、よけい淋しくなつてしまつた。

けれどその夕方のことであつた。兼子は悲しみを胸に抱いて、庭の中をあちこち歩いてゐた。ひえくしたこの頃の寒さのために、もう蟲の音も細くかす

れてゐた。それを聞くと自分の身が顧みられた。そして、思ひあまつた氣持で先生に對する戀しさを籠めて、低くうたいはじめた。するとどうした譯か、つぶれた聲ながらも、今日に限つて一脈の聲が出て來た。

その時兼子は、今まで暗い悲しみの中にゐただけに、もうすつかり聲に對して希望が出て來た。

「嬉しい、嬉しい。お母さん。」と云ひながら、兼子はそのまゝ部屋へ駆け込んだ。そして、飾つてあつた先生の、寫眞の前に座つて、厚く御禮を云つた。日もあらうに、四十九日の日といふのが、兼子には不思議でならなかつた。兼子の母もあわてゝ入つて來て、それを聞いて喜んだ。

かうして兼子は、明るい氣持になつた。けれど、まだ聲はかすれてゐる。すつかり癒るには、まだ日數があらう。

けれどその翌日から兼子は、いそぐと學校へ行つた。皆は兼子の話を聞いて、

「あら、それはよかつたのねえ。あたし達はそりや心配してたのよ。けれど、もういゝわ。何だかかうして、お話してゐても、この間うちよりは、お聲がよく出るやうね。」と云つたりした。

「えゝ、でも、まだなかくね。これぢや低音の唄ひ手よ。さうでなければ、せいぐ中音の唄ひ手ぐらゐねえ。」

かう答へる兼子の顔には、どこかまだ淋しさがつき纏つてゐた。けれど皆が慰めて呉れたり、元氣をつけて呉れたりするのを、嬉しく聞かれるだけの氣持になつてゐた。

「もう學藝會も、あと一月とはないことですから、どうかそれまでに癒つてち

ようだいね。」

「えい、ありがたう。きつと癒るわ。」

皆はもう笑ひ顔で、ほととぎすさんと云ふことが出来るやうになつた。それだけ兼子の聲に對して、心配する度合が少くなつたわけであつた。

秋は老けて行つた。兼子にとつて、恐らく一ばん思ひ出の深い秋が——そしてたつた一つの望は、今度の學藝會までに、すつかり聲が癒つて、これまでにない出來榮えを、示したいといふことであつた。

兼子の先生を慕ふ氣持は、ますます強くなつた。胸の石碑は兼子にとつてはこの世ならぬ光りを放つてゐるやうに思はれた。その光が恐らく自分の前途を照らすものと思はれた。

胸の中に

白き石碑あり

慕はしき文字を

小さく刻めり。

惱ましき思ひの黄昏は

胸の中に暗けれど

石碑はほゝゑみ

懐かしき魅惑を

集めて立つ。

日毎の惱ましき思ひは
この碑蔭に埋めなむ
そは、慰さめの
石碑なれば――

(兼子の心に代りて唄へる)

愛しい犬よ

お前は淋しい犬です。いつもお前の眼を見て、私はつい心細くなつてしまひます。

お前はあのお寺の白壁の傍の、いぢけたかなめの樹の下に捨てられてゐました。小さな鼻をくんく鳴らして、短かい脚でその邊を匂ひ廻つてゐました。その容子は無邪氣と云ふよりも、まるで自分の哀れな運命を知つて、それを慨いてゐるといふやうに見えました。

私はちやうどお使の歸りでしたが、あんまりいぢらしいので、拾はずにはゐられなかつたのです。私がそつとお前を拾つた時、お前は凡てを私に委したといつたやうに、おとなしくなりました。私はそれを見て、よけいにいぢらしくなりました。

何といふ哀れな境遇に生れたお前でせう。私はお前を捨てた人が、憎らしく

なりました。少女心から出た単純な同情だとか、感傷的な氣持だとか云つて、嘲けられやうとも、私はかまひません。私は一途にお前が可哀さうだつたのです。

でも、それももう二年ほど前のことになりました。お前はその後ずつと私の家にゐて、大へん可愛らしくなりましたが、あまり丈夫ではありませんでした。私をはじめ家のものにも、よくなつきましたが、どことなく元氣がありませんでした。

でも私は、お前の眼を見てゐると、やつぱり淋しくなるんです。犬といふものは、眼が心のやうな氣がします。眼の中に、何もかもが表れてゐるやうな氣がします。そのせいか、私はお前の眼の中に、淋しさを見るのです。たしかにお前の眼は淋しい眼です。そして、何となくお前の眼は、人間の眼に似てゐる

やうに思へます。

お前の眼を見てゐると私は、だん／＼見てゐることが辛くなつて來ます。どうしてでせう？ 私に考へてみたこともありました。けれど、別に理由はみつかりません。でも理由と云へば、恐らく人間の眼が、犬についてゐると思ふからでせう。

今日は駄目

お歸んなさいと

云つて追へば

ちつと見上げる

お前の淋しい眼

やがて日も暮れて

お前の眼の中に

星がうつるだらうに

考へただけでも

淋しい淋しいことだわ。

その日、私は兄さんの御病氣をお見舞に、汽車に乗つて、海岸の病院へ行かなくては、ならなかつたのです。お前を乗せて連れて行きたかつたけれど、たゞ遊びに行くのではないからそれも出来ませんでした。だつて、兄さんは、二日づけて咯血しておしまひになつたのですもの、私にさへ淋しく思はれるお前の眼を、兄さんに見せたくはないわ。兄さんは病氣のために、ひどく心を動

かされ易くなつていらつしやるもの。

私は汽車の中で、お前の眼のことを考へました。やつと追つてお前を歸らしたわけだつたからよけいにお前の眼は淋しくなつてゐました。もう電燈がついた汽車の中は、うすぐらい影が、方々の隅つこに溜つて、兄さんのことを考へる私を、ひどく淋しくさせました。九月はじめの晴れた空に、星が放れくぐりに光つてゐました。「星も淋しさうだ。」と、私は何故ともなく呟くのでした。

病院に行つてみると、兄さんは思つたよりも元氣でした。ひよつとすると、私を心配させないために、わざと元氣にしていらしたのかも知れません。

「よく来てくれたね。お前も大變だらうから、強ひて来て貰はふとは思はなかつたんだよ。」

「まあお兄さん、そんな御遠慮なすつちやいやよ。あたしいつたつても来るわ。」

「お兄さんがさう云つて下されば。」

兄さんは、それつきり黙つて、ちつと天井を見上げていらつしやいました。何といふ淋しさうなお顔でせう。でも兄さんはきつと、自分の運命に驚かないだけの、決心をしていらつしやるのでせう。その青ざめたお顔には、惱ましい心の動亂といふものゝ影がすこしもありますでした。

だが、私兄さんのお顔を見てゐるうちに、何といふ驚きを味つたことでせう。その眼はそつくりそのまゝ、お前の眼だつたのです。さつき停車場で別れたお前の、あの淋しい眼そつくりでした。私は思はず聲をあげようとさへしました。

ほんとに、それはそつくりそのまゝと云つてもいゝくらゐでした。でも、そんなことは兄さんには、勿論申しませんでした。たゞ、お前がやつぱり兄さん

と同じやうな心を持つてゐるのではないかと考へました。

一時間ほど、私は兄さんの傍にゐました。そのうちに、兄さんは寝ておしまひになりました。

草根くぐる

ながれのやうに

ひそかな吐息

皓き齒のあいまを

くゞりぬけ

紅き唇のうへに

たゆたひぬ。

私は兄さんの唇のほとりに見てゐました。

そこで、私は兄さんが死んでおしまひになつた後、どんなにお前を可愛く思つたか、お前の眼に兄さんのお眼をしのび、しばしばお前の眼を夢にみたか、まるで私はお前と同じ血の流れてゐる姉弟のやうな気がしたか、そんなことについては、いくら筆をもつても書き足りないのです。

お友達から犬狂ひと云はれるまでの、私のお前に對する行動も、病院に行つた時の挿話から、しよせん起つたわけでした。可愛いヨリミちゃん、どうか丈夫で長いこと私の傍にゐてちようだい。

山海往來

一
S女學校で、皆からも羨ましがられてゐる大の仲好しは、四年の松波しづ子さん、二年の石井みさをさんでした。松波さんは脊のすらりとした方で、美しい眼の持主でした。石井さんは二年でも、並べばいつも列の末の方にあるくらゐでしたから、脊は高くはありませんでした。それに、ふさふさした髪を、さらりと肩へかけてゐる容子が、大へん可愛くて、まだ小學校へ通つてゐるのではないかと、怪しまれるほどでした。

松浪さんと石井さんは、いつも一しよにゐました。十分間のお休みですらも二人が肩を並べてゐないことはありませんでした。影と形といふ形容詞は、そのまゝこのお二人のうへにあてはめてもいゝやうでした。

松波さんは、石井さんと寄り添つて、かい抱くやうに、石井さんの優しい肩

に手をかけてゐました。石井さんは、搖籠の中にうつとりと、眼を輝かしてゐる赤ん坊のやうに、その可愛らしいつぶらた目をみひらいて、ちつと松波さんを見あげてゐるのが常でした。

二人がさうやつて向ひ合つて並んで立つと、石井さんの頭は、ちやうど松波さんの胸のところにありました。ですから、石井さんは、ちつと松波さんの顔を、下から見あげるやうな調子になるのです。

その容子はまあ何といふ可愛らしい、美しい情の溢れたものでしたでせう。はじめのうちは、皆はこの二人のことを、いろいろに噂しました。少しは羨ましさも手傳つたからでせう。妙に皮肉なことを云つてからかつたりしました。けれど、二人はそんなことを、ちつとも氣にしないで相はからず仲好くしてゐました。

「松波さんと石井さんは、まるで御姉妹ね。」

そんなことを、他の人たちが云ふ時、松波さんも、石井さんも、胸の中でいつも、「姉妹以上だわ。」と考へました。それほど、二人は仲好しでした。

二人のリボンはお揃ひでした。靴も風呂敷も、帯もお揃ひでした。知らない人が二人を見比べる時、ほんとの姉妹と思はない人はいくらゐでした。

そんなふうでしたから、うるさい皆の皮肉も嘲笑も嫉妬も、やがて跡なく消えるやうになりました。まつたく、二人がちつとも、皆の言葉を氣にしないでゐては、皆も張合がありませんでしたもの。同時に、美しい松波さんと、可愛い石井さんの寄り添つた。その美しい可愛らしい情の現れに對して、心から讚美を捧げずにはゐられなくなりましたもの。

清い美しさといふものは、やがて勝つものだ——といふ言葉は、この二人の

ためにも、眞理でありました。

二人は一口に云へば、フランス風でした。どちらも明るい氣持の方で、二人が楽しさうに、寄り添つて話してゐる容子は、まるで二羽の小鳥のやうでした。ちつとも心配ごとなんかなささうで、見る者にまでおだやかな心持を起させました。

それがどうしたといふんでせう？ 楽しかるべき夏休みの前になつて、二人の容子には何となく氣持のすぐれないことがありさうでした。どうしたんでせう！ 皆はこの頃では、本氣に二人のことを心配しはじめました。

それには理由がありました。

夏休みが来ると松波さんは、少し身體の悪い母様と一しよに、山の温泉に行くことになつてゐました。石井さんは、弟さん達と一しよに海へ行くことにな

つてゐました。それが、二人を悲しませたのでした。

海と山へ——二人の仲は割かれるのでした。それは、どんなにか辛いことでせう。一ヶ月以上の夏休みを、顔見ること出来ずに、遠く離れてゐなければならぬとは！ でも別れなければなりませんでした。

「お手紙を毎日のやうに下さいね。」

「え、」

二人は固い約束をしました。

二

山からの便りが、まづ来ました。その便りには、こまぐと別れた淋しさが書いてありました。海の少女は讀むまゝに、涙が流れて来るのをせきとめることが出来ませんでした。けれど、これから便りの度に、詩を書き合つて、せめ

ても慰めにしませうと書いてあつたことは、たいへん海の少女を喜ばせました。

「あたしも出来ないながら、作つてみよう」

かう海の少女は呟きました。

海の少女はさつそく、同じやうにこまごまと別れた淋しさを書いて、そのおしまひに詩を書きました。

君に別れて

夢多し

海が奏づる

子守うた

山の便りがまた来ました。

それは、山の温泉の繪葉書でした。たつた一つ、詩が書いてありました。

君に別れて

さびしくも

山に来つれど

あを芒
風に揺られて
ゐるばかり
君の御聲に
似もやらず。

海の少女は、長い浴衣の袂を風になぶらせながら、ちつとその繪葉書を見て
みました。そして、山へ行つてみたい氣になりました。海の少女はまた便りを
書きました。やはり海の繪葉書に、詩ばかりたつた一つ。

今朝も渚に

たたずんで
君を偲べば
かもめ鳥
友にはぐれて
泣いて居た。
あたしも海の
かもめ鳥
波にききたや
君のこと。

山からの便りが、また来ました。

山はまつかに

夕焼けて

あたしの心を

燃やすゆえ

君戀しさが

なほつゝのる

いつそ消しましよ

涙の雨で

山の夕焼

ともぐくに。

かうして山の少女と海の少女の便りは續きました。その翌る日も、またその翌る日も……。遂に長い夏休みは、そのやうにして終りました。たつた一度も遭ふことが出来ずに、けれど、二人の取り交した詩の手紙は、二人の仲を一そろ濃く美しくしました。

少女の心といふものは、かうしたことに、かやうに動くことを知らなかつた松波さんも兄さんは、休暇が済んで松波さんが東京へ歸つて来た時、ふと手箱の中から石井さんの詩を見つけて、

「おい、しづ子、これや何だい。くだらない詩を書いてゐるんだね。お前も詩を書いて、やり取りしたやうな容子だが、こんなことは止めた方がいゝぜ、淋しいとか、悲しいとか、遭へないとか、めそぐしてゐる間に、大いに散歩でもした方がいゝぜ。」と、云ひながら、石井さんから来た大切な便りを、ぴりつと

破つてしまいました。

松波さんは、すつかり兄さんの亂暴に、あきれて泣いてしまいました。翌る日、學校へ行つた時、松波さんは石井さんと手を執り合つてかう云ひました。「あんないゝ夏休みの記憶を、最後の日になつて、わからずやの兄さんに穢されて、あたし、もうそれはく口惜しいのよ。」

「まあ、ひどいお兄さんねえ、でも、あたしのお手紙だからよかつたわ、もし、あたしにお兄さんがあつて、お姉さまから来たお手紙を破つたんなら、あたし、それこそ悲しくつて悲しくつて………」

石井さんは、悲しさうに眼をしばたゝきながら云ひました。

「いやあよ。あたしだつて、あなたから来た手紙だからこそ、こんなに口惜しがつてゐるのよ。」

松波さんは、さう云つて、ちらつと前齒を見せて、唇を噛みました。

お姉さんは嬉しかつたのでした。何か云ひたいものが、胸につかへてゐるやうな氣がしましたが、みさをさんと呼んだつきり、石井さんの胸へ顔を埋めてしまひました。

だが、美しい山海往來の記憶——遠く山と海とに別れて、心を通はせた記憶は、兄さんが石井さんの手紙を、破つてしまつたにしても、恐らく二人の頭から薄れ去ることはないでせう。

六月の花園

あなたは春の霞でせう
 ほのかに煙る霞でせう
 日にうらうらと照り榮えて
 夢みるやうに裾をひく
 あなたは春の霞でせう
 ほのかに煙る霞でせう。

兼子さんは、このごろ詩を作るのが好きになりました。兼子さんの先生、それは師範學校を今年卒業して、いきなり兼子さんの學校へいらつした、大へん新らしい氣持のよい奥村しづ子と仰言る先生ですが、その先生が、みんなに詩

を作つてごらんなさいと仰言つて、作文の時間になると、作文の代りに詩を作
らせたりなさるのでした。

兼子さんは、まへから詩が好きでした。けれど難かしいやうな気がして自分
では作りませんでした。それでも、作文の時間にさう云はれたので、はじめに
書いたあの六行の詩を作つたのでした。ところが、その日から三日たつと、ち
やんと赤いインキで評をつけて返して下さいましたのを見ると、兼子さんは、
大へん喜ばずにはゐられませんでした。

それをもつともでした。だつて評にはかう書いてあつたんですもの。

(評)女學校の一年生として、どこへ出しても耻かしくもありません。あなた
が詩にしたいと思つた、その方の容子なり気分なりが、春の霞を出して
ほんとはよく出てゐます。でもね、兼子さん、あなたが詩にしてみよう

とお思ひになつた方はどなたですか、お友達なのですか。

兼子さんは、それを讀んで、喜ばしくは思ひました。けれど何だか妙に心が
そはく／＼しました。でも兼子さんが詩にしたその方といふのは、他でもありま
せん。奥村先生御自身なんですもの。

白い顔、涼しい黒い瞳、つや／＼しい髪、そして、みづ／＼しくいつも濡れ
てゐる赤い唇——奥村先生のその御顔は、兼子さんの心の中では、どんな悲
しい時に思ひ浮べても、いつもにこやかな微笑んでゐるのでした。それに奥村
先生の御容子が兼子さんにとつては、堪らなく心を惹かれるのでした。おつと
りした、やさしいお心が、そのまゝ御容子に表れたとでも思はれるやうなので
した。だから兼子さんにとつては、奥村先生は何となく先生といふよりも、お
姉さまといふやうな気がするのでした。

作文の時間に作った詩も、先生をうたつたのではありますが、あなたといふ言葉を使つたのも、實はその碎けた氣持を表はしたかつたからです。

かうして、はじめて作った詩に力を得た兼子さんは、大へん詩を作ることが好きになつて、薔薇の花のついたノートブックに、それからそれと先生を思つて詩を書きました。

また作文の時間に、先生が詩を作つてごらんなさいと、みんなに仰言ました。今度も兼子さんは、こんなのを作りました。

ましろき薔薇の花

やさしくわが心にふれて

はらくくと露を落せば

わが心たちまち波うちて

五色の夢しづかに見ゆる

あゝ、わが君は白き薔薇

絶え間なくわが夢を育つ。

この詩も賞めてありました。そしてわが君とはどなたのこと、この前の詩のと同じ人ですか？ と書いてありました。兼子さんは、どきんとしました。

その日の放課後のことでした。兼子さんが一人で運動場の隅の花園に遊んでゐますと、ちやうど奥村先生は、小聲でローレライをうたひながら、しづかに歩いていらつしやいました。兼子さんはそのお姿を見ると、顔があつくなつて、胸がどきどきしました。もしか先生が、あの詩のことをお云ひ出しになつたら

どうしよう、何と答へようと思ふと、このまゝ逃げ出してしまはうかとすら考へました。

けれど、先生はすぐ傍へ来て、兼子さんの肩を叩きました。

「兼子さん何をしていたらつしやるの」

やさしく先生はお尋ねになりました。

「えゝ」と、兼子さんは顔を赤めて云ひ溢りました。まつたくのところ、お答へすべきほどのことを、してゐたわけでもありませんでしたから。

「ね兼子さん」と今度は先生はすこし態度を改めて仰言ひました。あなたは詩がお上手ですね。けれど、あなたとかわが君とかいふのはどなたのこと？」

兼子は耳の中に錐をもみこまれたやうに、ずきんと痛みを感じたやうな氣がしました。云はうか、云ふまいかと、かなりためらつた後、兼子さんは嘘を云

ふことも氣がひけたので、

「奥村先生のことです。どうぞ御免下さいませ。」と云つて、袖を顔にあてました。

けれど、先生は別にお怒りにもなりませんでした。兼子さんがそんなに心配したほどのことは起りませんでした。

「まあ、さうですか。」と云つて、先生は優しく兼子さんの頭をお撫でになりました。もう凡ては解つてゐます。そんなに氣にしなくてもよござんすと、仰言つていらつしやるかのやうに――

六月の花園には、きれいな花が一ぱい咲いてゐました。そして、兼子さんは世界中で一ばん幸福な人であるかのやうでした。顔にあててゐた袖をとつて、輝やかな顔をしてゐました。

流れゆく水

年が逝く、三百六十五日の朝夕が、次々に流れ流れて、たうとう大晦日が来ることになりました。加奈子さんはちつと眼を瞑つて、この一年といふ月日を長い糸をするくと、糸巻から繰り出すやうな氣持になつて、思ひ浮べてみました。

春——夏——秋——冬——と、順々に思ひ浮べると、何ていろくなことがあつたらうと、懐かしいやうな、でも何となくうら淋しいやうな、ちやうど自分の小さかつた時の、色の褪めた寫眞に、飽かず見入る時のやうな氣持になるのでした。

「あゝ數々の思ひ出よ。」

加奈子さんは、妙に改まつた氣持になつて、そんなふうに感慨に堪へぬといつたやうな口調で、小さく呟やくのでした。これは、加奈子さんの従兄の、大

學に行つてゐる人が、何かといふと妙にがつくりとわざとらしく小首を垂れて「あゝ數々の思ひ出よ。」といふのを、加奈子さんは自分のほんとの氣持から、思ひ出を懐かしむにつけて、つい思はず知らず眞似をしたわけでした。けれど、云つてしまつてから、それが従兄の口癖だと氣がついて妙に可笑しくなりました。加奈子さんの顔には、その時、軽い微笑が五月の風のやうに軽くさらつと過りました。

だが加奈子さんは、やがてまたしんみりと、思ひ出に耽るのでした。家の人たちは、明日が新年だといふので、てんでにさはめいて、加奈子さんが書齋に籠つて、ちつとしてゐるのなんか、まるで忘れてしまつてゐるやうでした。加奈子さんにはそれをいゝことにして、出て行けば出て行つたで、いろく〜と川事もあることだらうとは思つてゐながらも、若い十七の年が逝くこの年の瀬を、

たつた一人で物を思はせて下すつてもいゝわと、自分で云ひ譯しながら、ちつと机の前に座つてをりました。

戸外も何かとざはめかしく、いつもは森閑としたこの山の手の屋敷町も、今夜だけは何となく異つた氣分に満ちてゐました。大晦日と云へば、誰も彼も忙がしがつてゐることだらうとは考へましたが、それでも加奈子さんは、きつとどこかで、かうして自分と同じやうに、年が逝くことをはつきりと胸に刻んでちつと座つたまゝ物思ひに耽つてゐる人が一人ぐらゐあるに異ひないと思ひました。

（その人は、恐らくは美しい人であらう。黒い髪が、ふさ〜と垂れさがつて電燈の花笠から射す薄紅い光に照された美しい顔に、何となく思ひ深げな影を落してゐることだらう。ここもちうつ向いたその人は、ちつと眼をつぶつて、

傍の瀬戸の丸火鉢にかざした白い手は、かすかに震へてゐることであらう。そして、その人はをり／＼溜息をついてゐることであらう。）

加奈子さんはその人を、幻として思ひ浮べながら、親しみを投げかけてゐました。ぼんやりとではありましたが、その幻の顔かたちは、どこかで一度見たことのある人の顔かたちになつて行きました。

（だが、その人はあたしと異つて、きつと素晴らしいほど立派な頭をもつた方だらうから、思ひ出もきつと彩色の多い詩的な、美しいものを持つておいでだらう。また、年が逝くといふ感想にしても、あたしみたいに、たゞぼんやりと考へるだけではなしに、もつと深い意味を籠めて、考へておいでだらう）

加奈子さんは、そんなことを思つてよけい淋しくなりました。十七の歳と別れてしまふといふのに、自分は何故こんなに、何も出来ないつまらない者であ

るのだらうと考へたりしました。

けれど、やがてそんなことも忘れて、加奈子さんは、思ひ出に耽るさつきの加奈子さんになつてゐました。

春——夏——秋——冬——と考へ起せば、加奈子さんにも、さまざまな思ひ出がありました。親しい友の綾子さんが、ふとした病ひで死んでしまつたこと、一年以來づつと机を並べてゐた多喜子さんが、寒い北海道へお父さんの轉任と共に行つてしまはれたこと、みんなして、大騒ぎしてゐた音楽の先生が、おやめになつたこと、人事の轉變もかなりありました。そして、それからはみんな時が、過去といふ名前をつけて、すつかり距てゝしまつたわけです。また加奈子さんの自分自身のことについても、いろいろなことがありました。はじめて一人旅で、栃木の叔母さんのところへ春のお休みに出かけたこと、お母さんの

コートを手を借りずに縫ひあげたこと、お庭で遊んでゐた時、足のうらに棘をさして痛みを訴へた時のこと、これらもやつぱり、二度とはめぐつてこない、時の流れの中の一つ一つの泡沫でありました。

思ひ出といふものは、他人から見ても、些細なつまらぬことでも、自分から見れば何にもかへがたい懐かしいものであることを、今度ほどはつきり知つたことはなかつたと、加奈子さんは思ひました。

加奈子さんは、ちつと、さうした思ひ出を、それからそれへと、思ひ起してゐるうちに、何となく眼瞼の裏が熱くなつて、いつか瞳が濡れたと見えて、あつたりの物が、ぼんやりと浮んで來たのを感じました。

加奈子さんは、よけいその涙に心を刺激されて年が逝くといふ心持になりました。その時、ふと、思ひ立つたのは、十七を送る詩を作らうといふことでし

た。

(あたしの十七の歳のために、十七の歳の名残りのために、出来るだけ立派な詩を作つてみよう。)

さつきの幻の人ならば、きつと立派な詩をお書きになるだらうけれど、あたしはそんなに巧く作れないわ。でも自分の力の及ぶだけ、やつてみよう、と、續いて加奈子さんは思ひました。そこで、加奈子さんは、ノートを開いて、ペンを執りあげました。まづ、「十七の歳のために」と詩題を書きつけました。それから暫く書いたり消したり、詩句を案じてゐましたが、やがて、かう書きました。

□十七の歳のために

あたしが持つてゐた
たつた一つの
誇まこりだつたお前まえよ。
やさしくすなほに
あたしに夢ゆめを呉くれた
しほらしい十七の歳としよ。

でも、もう、さよなら
涙なみだ聲こゑであたしは云いふ
ほの暗くらい草くさかけを
しづかに流ながれる水みづのやうに

「思おもひ出で」をひきずりながら
音おともなくあたしから
迂まがり出でて行ゆくお前まえに。

加奈子かなこさんは、これを半紙はんしに書かき直なして、折をり疊たんで、机つくえの抽ひ出きしに入いれま
した。ちやうど、その時とき、祖母そぼさんが入はいつていらして、
「おやく、御勉強ごんきんきやうだつたのかえ。もうやがて、鐘かねが鳴なりますよ。」と言こと葉はを切きつ
て、「加奈子かなこもいよいよ十八におなりだねえ。」と、かなり感かん慨がいに堪たへぬといつた
やうな顔かほつきでした。

241
「え、あたし十七に別わかれるのはいやなのよ。」
「おやく、そんなに悲かなしがらなくてもいいよ。お祖母そぼさんなんか、明あければ

七十三ですよ。」と、微笑んでおつしやいました。

「え、そりやさうですけど……」と、思はず加奈子さんは、笑はずにはゐられませんでした。

「でも、お祖母さんも、十七の歳に別れるのが、いやだつたこともありましたが、無理もないことだねえ。」

その時、百八つの鐘が、空い夜空に響いてか、鋭い金属性の響をたて、鳴り響いて來ました。思はず、二人は顔を見合せて、黙つたまゝ、鐘の音に聞き惚れました。そして、どちらがさきにともなく、お互に溜息をつきました。

老衰と青春が、時の流れの前にちつと、顔を見合せてゐるこの場面こそは、何といふ意味深いものだつたでせう。鐘の音は一つ一つ次から次へと鳴り渡つて、急に襟元が寒くなりましたので、加奈子さんは、

「あつちへ行つて、お茶でも飲みませう。」と、祖母さんを促しました。

美しい秘密

湖のはとりに、一人の娘が住んでをりました。娘は心から湖を愛してゐました。

湖は牛の脊中のやうな、山々に依つて、ぐるりを取り圍まれてゐました。即ち、この山々は湖を安全に守る、勇士の役をつとめてゐるのでした。

この山々に守られて、湖はいつも安らかに微笑んでゐました。少女の眼ざしのやうな、あどけない輝きが、その微笑の中にありました。

朝起きると、娘はいつもこの湖の水で、顔を洗ひました。そして、湖の冷たい水が、娘の臉から眠りを、すっかり拂ひ退けてしまうと、娘は晴れぐし
た眼で、一わたり湖を眺めるのが常でした。

晴れた日だと、静かな湖のうへに、山々が影を落してゐました。山々のうへに遙かに擴がつてゐる空も、その空に軽やかに浮んでゐる雲も、影を落してゐました。その静けさ、それはちやうど、人が懐かしい昔の思ひ出を、静かに思ひ耽つてゐるやうでした。

娘は引き込まれるやうに熱心に、眼を輝やかして眺めました。娘の心は幸福でした。

やがて、娘は自分の姿をも、湖の面に映してみることを忘れませんでした。

娘は岸に立つたまゝ、身體を曲げて、湖を覗き込みました。そこには、微笑を浮べて娘の顔と、元氣な娘の姿とが、きれいに映つてゐました。娘は手を上

げてみたり、足を動かしてみたりしました。そのたんびに、娘の脊中に長く垂れた頭髮が、快活に躍りあがるのでした。湖はそれらの一切の動作を、その通りにちやんと映しました。娘は我を忘れて、その面白さに浸るのでした。湖も心ない山や雲を映すよりも、このあどけない娘の姿を、映し出す方がよほど嬉しかつたでせう。

娘は自分のことを、ある時から考へました。

「わたしは、きつと湖から生れて來たにちがひない。」

なるほど娘が、さう考へたのも、無理はありませんでした。娘は湖を見なすと、淋しくつて堪りませんでした。娘にとつては、この湖はお友達でした。

いや、それより以上でした。云はゞ娘にとつては、この湖は懐かしい親でした。また、娘を生きさせて呉れる保護者でした。

といふのは、娘はたつた一人で、この湖のほとりに、暮してゐたからでした。そして、この湖でお魚を釣つて、山を下つて町の方へ賣りに行つて、生活をたてゝゐたからでした。

娘にも父や母はありました。けれど、父は早く死んでしまつて、顔さへも覚えてはゐませんでした。母と二人で暮してゐましたが、母は娘を捨てゝ、どことも知れず行つてしまひました。娘は父や母に、何等の愛着をも覚えませんでした。それよりも、湖の方がどんなに、娘を愛して呉れたかわかりませんでした。

湖は娘を慰めました。この頼りない娘の、只一人の味方であるかのやうに深い愛をもつて慰めました。

淋しい時、悲しい時、娘は湖のほとりをさまよひました。さや／＼と風に鳴る汀の青い蘆が、娘の淋しさ悲しさを招いて、やがてそれを湖の底ふかく、沈めて呉れました。

湖に棲んでゐる白い水鳥も、娘の淋しさ悲しさを啄んで、軽やかに水をくぐりながら、やはり湖の底ふかく、沈めて呉れました。

かういふ云ひ方をしましたが、それはつまり、娘が淋しい時、悲しい時に、風の渡る蘆の葉や、水鳥の面白い容子を見て、いつか淋しさや悲しさを、忘れることが出来たといふことなのです。

娘は心の素直な、やさしい子でした。それも、湖に依つて教へられたためでした。

何故なら、湖ほど素直なやさしいものはありませんもの。風が吹けば吹かれるまゝに、湖は波だちました。また日が照れば、きらきら、美しく輝きました。この素直さは、娘の心に深く刻み込まれました。

やさしいと云へば、湖ほどやさしいものもありませんでした。何故なら、湖は山々から流れて来る水を、よしんばその水が汚れてゐる時でも、流れ込むことを嫌がつたことはありませんでしたもの。また、水鳥を安らかに棲はせ、自由に蘆の茂るまゝに茂らせました。このやさしさも、同じやうに娘の心に深く刻み込まれたことは、云ふまでもありません。

かうして、娘は湖のほとりに住んでゐることを、いつも感謝してゐました。

まつたく、娘にとつては、この湖のほとりほど、楽しく美しく懐かしいところは、この世にはありませんでした。娘が町に魚を賣りに行く時、湖のほとりにたつた一人で暮してゐて、さぞ淋しいだらうと云はれるのが常でした。けれど、娘はたゞ首を振つて、笑つてゐるばかりでした。町へ来て住んではどうかと、熱心に勧める人もありませんでした。娘は美しかつたので、いろんな誘惑もありました。でも娘は、そんなことには耳も貸さず、夕暮が来ると籠を背負つていそぐと湖のほとりの家に、歸つて来るのでした。

だが、何故にかうした娘に、淋しさや悲しさがあるのでせう。

賢い讀者は、すでにいくらか、お察しをなすつたことゝ思ひますが、娘の淋しさや悲しさは、父母がゐないといふことから、來てゐるのであります。父母もなく只一人で暮してゐるといふことが、どんなに淋しく悲しいことであるか、皆さまは充分にお察しなされることが出来ませう。娘は湖のために、心を養はれ、淋しさや悲しさを紛らされてゐましたが、湖と話が出来ないことをいつか不満に思ひはじめました。

手を組んで胸にあてゝ、涙ぐましい眼で、湖を見てゐる日が娘には多くなり
ました。

さうした時、娘はいつも心の中で、かう呟やいてゐるのです——ほんとに、あたしは湖のほとりで、かうして暮してゐることは、嬉しいんだけど、湖とお話が出来ないことだけがつまらないわ。犬も猫も聲を出すことが出来る、鳥も啼くことが出来る、それなのに何故、湖ばかりはいつも黙つてゐるのでせう？——この呟やきに、娘の心から滲み出たものでした。苦しい惱ましい氣持といつしよに、滲み出たものでした。

娘はある日、町へ出た時にかう訊きました。

「何故、湖とお話が出来ないんでせう。」

町の人たちに、娘の言葉を聞いて笑ひました。娘がどんなに苦しい惱ましい氣持で、訊いたのかも知らずに、聲をたて、笑ひました。娘は淋しさうに、その長い睫毛をふせて、ぢつとうつむいてゐました。やがて、睫毛には白い涙が光りました。

「湖と話すよりも、町へ出ておいで、さうすれば、お友達も出来るし、心から話し合ふことも出来るよ。」

ある人は、娘の涙を見て、慰めるやうに云ひました。けれど、娘は首を振つて、やつぱり来た道を引き返して、湖のほとりの家に歸りました。

娘は町の娘たちが、嘘をつくし、喧嘩をするし、たゞ／＼上面のことばかりを問題にして、きれいな着物を着たがったりしてゐることを、よく知つてゐましたから、お友達になりたいとは、決して思ひませんでした。

話しは出来なくとも、湖といつしよにゐる方がどんなにいゝかわからないと娘ははつきりと思ひ返したのでした。

その時、娘の頭の中を、電光のやうにすつと過つて行つた一つの考がありました。

それは、かういふ考でした。「どうせ、死んでしまふ運命なのだから、いつそ湖へ入つて死んでしまはう。さうすれば、あたしの身體は湖の中へ溶け込んでしまふに異ひない。そしたら、話しが出来ないなぞと、悲しむ必要は少しもない。」

娘は窓に凭りかゝつて、湖を見ながら、さう考へたのでした。自分の身體が、

湖の底に沈んで、青い藻草にからまり、やがて溶け込んでしまふ容子が、鮮やかに幻となつて眼に浮びました。娘は少しも悲しいとは思ひませんでした。悲しいどころか、さうなれば、どんなに嬉しいだらうと、胸をはづませながら考へるのでした。

町の人たちは、湖の魚を賣りに、娘が来ないのを怪しみました。

でも、その時には、すでに娘は湖の底ふかく沈んでゐました。美しい悲劇は、誰にも知られずに、やすく一行はれてしまつてゐたのでした。名をつければ、美しい悲劇と云はなければなりませんでしたが、娘にとつてそれは悲劇ではありませんでした。湖に飛び込む瞬間にも、娘の顔に喜ばしい微笑が浮

んでゐたことはもちろんのことです。

町の人たちは、やがてこのことを知りました。それは、いつ歸つて來るとも知れぬ無情な母にあって、娘が書き残したおぼつかない手紙に、娘が湖に沈んで死んだといふことを讀んだからでした。あの美しく素直な娘が、むざむざと湖に沈んだことは、何と云つても、町の人たちの心をうつ出來ごとでした。人たちは湖のほとりに、小さな祠を立て、この娘を祀りました。

「これが、この湖にまつはる傳説です。」と云つて、K子はちつと車窓の外を見ました。そこには湖が、青く光つて、ぐるりの山々に守られて微笑んでゐました。

「まあ、すゝめ美しい物語ですこと！」

S子は感に堪へぬといふやうに、しみぐと、この湖を眺めました。
 汽車は湖のほとりを、先刻から走つてゐました。

K子はS子が、あまり感心してしまつたことを、不氣味に思ひました。何故なら、實はこの傳説といふのは、K子が自分の頭の中で作りあげたもので、別に誰から聞いたといふわけでもなく、もとより傳説集の中で讀んだものでもありませんでした。

たゞK子は、先刻からこの湖を見てゐるうちに、もしもこの湖に何か美しい物語がまつはつてゐたら、どんなにか嬉しいだらうと思つたのが、遂に彼女をして、かうした一篇の詩にも似てゐる美しい物語を、頭の中に作りあげさせることになつたのでした。

S子は窓へ頭を出して、うつとり湖を眺めてゐました。やがて、S子は懐

中の中から、手帳を出して、そゞくさと何か書きつけてゐました。書き結るとS子は、K子を願みて云ひました。

「ねえK子さん、あたし今のお話を伺つて、たいへん心を動かされましたの。そして、ふと頭に浮んで来るまゝに、こんなものを作りましたのよ。」

K子はS子の手から、手帳を受け取つて、肌をそゞぎました。

湖に沈んだ娘に――

春の光の

さゞめく湖の面

柔らかき水色の

絹を張りし

クツシヨンにも似たる

しなやかな湖の面

おゝされど見よ

青く遙けき光

湖底よりのぼり來り

かそかにさみしき歎息の

湖の面にかゞよへるを――

K子はこの詩を讀んで、たいへんよく出來てゐると思ひました。美しい詩情が、ゆたかに波うつてゐると思ひました。

さう思つただけに、K子はS子に對して、今話した傳説が、全然つくりごとであるといふことを、うち明ける勇氣を失つてしまひました。うち明けたら、どんなにS子さんは失望するだらうと考へると、胸も重くなりました。

汽車は湖をぐるりと廻つて、また山路にさしかゝつて、車窓の左にあつた湖は、だんだんと後になつて行つて、山の影にその一部が、白く光つてゐるだけになりました。

S子に伸びあがるやうにして、熱い視線を送りながら、

「さよなら、きれいな湖、さよなら、湖の娘さん。」と、小さく呟やくのでした。K子はS子の小さな呟やきを耳にすると、涙ぐましいまでに、心をうたれま

した。

「あんなにも、信じ切つていらつしやるのに、とてもくうち明けられない。」
さう思ひながら、S子に對して嘘をついたことを、心の中で詫言ひました。だが、K子は秘密を持つ苦しさを、味はずにはゐられませんでした。彼女はやく、伏目になつて、指さきに袴の紐をもてあそびながら、溜息をついてゐました。
「どうしたの？ K子さん！ 湖に沈んだ娘のことを考へていらつしやるの？ 何だかしほれていらつしやるので、氣にかゝるわ。」

S子からさう云はれると、K子は急にS子の手を握つて、

「御免なさい。あたし悪かつたわ。」と云つて謝罪まりました。

「どうして？ まあ！」と、S子は不思議な顔をしました。

「あのね、あたしのお話しした傳説といふのはね、ほんとはあたしが作つたの

よ。湖を見てゐるうちに、何か美しい傳説が、ほしくなつたからでした。ね、御免なさい。あたし、何も企らんで、あなたを瞞さうと思つたのぢやないのよ。瞞すと云へば、自分を瞞したかつたのかも知れませんが、どうぞ、許してね。」
K子は心から詫言ひました。

「まあ、さうでしたの。でもいゝわ、あたしお蔭でどんなにかしみく、湖を眺めたことでせう。それに、詩を一つ作ることが出来ましたもの。ちつとも悪かないわ。何ものにも美しいものを、求めようとするあたしたちなんですもの。ね、それよりも、二人だけが、あの湖の美しい傳説を知つてゐるといふことに、しておきませうよ。その方がどんなに幸福だか知れやしませんわ。」

S子にさう云はれると、K子は心が安らかなになつて行くのを覺えました。

「さうねえ、それがいゝわねえ。」と、K子は輕やかな氣持で答へました。「あた

「私たち、二人だけの美しい秘密ですわね。」

「さうよ。この美しい秘密の中で、永久にこの知られざる娘に心を寄せてゐませう。」と、S子も軽やかな氣持で答へました。

二人はずつと近く、お互の心が寄り添つたことを、深く深く感じました。

小さな事件

お友だち同志

心と心の

つながりの糸は

懐かしい夢を響かす

うすもゝいろの

夢の糸

お友だち同志

心と心の

つながりの糸は

道化者の笑ひを奏でる
かどやかに明るい
金の糸

ふたすじの糸を
心と心とがやすくと
たどれるやうに――
ちよいとしたことにも
さはやかに響が
溢れるやうに――
いつもいつも

張り切らしておきませう。

「どうしたの？」

「どうもしないの。」

「なにか譯があるの？」

「いゝえ、譯なんかないわ。」

「ぢや、どうしたのよう。」

「どうもしないのよ。」

いつまで、言葉を交し合つてゐても、つまるところ、どうしたのか解らなかつた。

愛子は久子の顔を、まだちつと見てゐる。もう根氣負けがしてしまつて、訊かうともしない。

けれど、その眼つきにも、顔つきにも、「どうしたの？」と、訊きたげな容子は、たつぷり溢れてゐた。そして、可愛い溜息が、をりく洩れて出た。

もう、月が昇つて、寒さうな光が、戸外に流れてゐた。葉の落ちた樹々の肌、どことなく寂しかつた。

「ね、久子さん、どうしたのよう。」と、やがて、またしても、やつぱり訊かずにはゐられないといふやうに、愛子は訊ねたのであつた。

久子は黙つたまゝ、ちつと窓の外を見てゐた。

二

暫らく時がたつた。

ふいに久子は、その圓やかな肩をゆすつて、さも可笑しさうに笑つた。今まで二人の間、醸されてゐた、妙なびつの氣分が、その笑ひといつしよに急に飛んで行つてしまつた。

愛子は嬉しくなつて、けれど、やゝびつくりしながら、訊ねたのであつた。「何か、そんなに可笑的いの？」

けれど、久子はやつぱり笑つてゐた。そして、答へようとはしなかつた。「ねえ、どうしたのよう？」

愛子はまた訊いた。やつぱり久子は、笑つてゐるばかりであつた。堪らなくなつて、愛子はかなり急ぎ込んで、

「ほんとに、どうしてそんなに笑ふの？」と、訊いた。

すると、またふいに、久子は笑ふのをやめてしまつた。そして、そつと下唇

を嚙んだまゝ先刻のやうに、戸外を眺めてしまつた。

樋に溜つてゐた枯葉が、風もないのに、つい窓のさきを、はらくと落ちて行つた。

二人の視線は期せずして、その枯葉をぢつと追うて、下の方へそゝがれた。けれど、窓の下へ落ちてしまつたので、窓を開けなければ、もう見えなくなつた。

二人は何となく、急に肩をゆかすにはゐられなかつた。淡い寂しさが、そつと軽く心の上を撫で、行つた。

愛子は久子のこと気がなつて、どうしたのか訊きたかつた。けれどその心持は枯葉のゆくてを追つてゐる間に、どこかへ行つてしまつた。久子のことよりも、枯葉のことの方が、何となく妙に気がゝりになつた。

三

でも暫らくしてから、愛子はいふ思はずにはゐられなかつた。

「仲のいゝお友達なのに、どうしてまあ、久子さんはこんなに、隠し立てをなさるのかしら？」

「いつたい、事の起りは、極めて他愛のないことなのであつた。

二人が若々しい氣持で、これから十年経つたら、どんなに變つてゐるだらうと、想像をお互に語り合つたのであつた。

やれ丸鬚に結つてゐるだらうとか、やれもう可愛い赤ちゃんがあるだらうとか、いえ、結婚なんてしないとか、尼寺へ入つてしまふとか、何とかかんとか話に花が咲いてしまつたのであつた。

さうしてゐるうちに、ふいに久子が黙つてしまつたのだつた。だから愛子は

何か氣に障つたのか知らと思つて、しつこく「どうしたの？」と、訊いたのであつた。

愛子は久子の氣を取り直さうと思つて、テーブルの上にあつた一輪挿しから、水仙の花をとつて、からかふやうに、その花で久子の顔を叩いた。

ほんの軽いいたづらの氣持、その氣持でしたことが、巧く久子の氣を取り直して、あんな隠し立てをよして下されば、どんなにいゝだらうと思つてゐた。

水仙の花は、久子の顔のうへを叩くたびに、いゝ匂を顔いつばいにふりこぼした。

四

すると、今度は愛子が、いぶかしさうに訊いた。

「どうしたの？」

「どうもしないわ。」

「何か譯があるの？」

「何も譯なんかないわ。」

「まあ。」と、一聲大きく愛子は叫んだ。「あなた、あたしの云つた通りのことを云ふのね。」

二人は顔を見合せた。そのうちに、何だか可笑しくなつて来て、笑はずにはゐられなくなつた。

「いやな愛子さん！」と、久子が云ふと、

「いやな久子さん！」と、愛子が云つた。

愛に二人の心がびつたり合つたやうな氣がした。

口にした言葉は、「いやな」といふ形容詞のついた悪口には異ひなかつたが、

決してその底に、悪意はなかつた。

二人は何だか變手古な氣持になつて——可笑しさと、まじめさが一しよになつて——手を握り合つたまゝ、窓に凭れてしまつた。

こんなことは、お友だち同志の間の、ごく些細な氣持の變化で、こんなことから、お互に白い眼で睨み合つたり、悪口を云ひ合つたりして、仲違ひになることがあれば、それはちやうど、靜かなお池にも、時には波が立つといふことを考へないのだ——二人は窓に凭れ合つたまゝ、さう思つた。

たしかに、それはさうだ。ちよいとしたことで、大きなものを失つては、たいへんな損失に異ひない。でも、久子と愛子は、その損失を、避けることが出来た。殊にテーブルの上にあつた心なき水仙が、この大きな役目をして呉れたことは、愛子にも久子にも嬉しいことであつた。

このことがあつて、二人は一そう仲よくなることが出来た。

運動場の隅

徳子さんは、この頃になつて、淋しい氣持といふものを、知るやうになりました。

よく、學校のお姉さんたちが、

「ほんとに、なんて淋しい日でせう！」と、上眼づかひに、空にぽつちりと浮んでゐる雲を見たりしながら、そんなふうになつて、何となく氣取つてゐるのだとばかり思つてゐましたが、やつとこの頃になつて、さうした態度もなるほどとうなづけるやうになりました。

學校の運動場の隅の、ちやうど教室の蔭になつたじめくした所が、妙に懐かしく心を惹くやうになつたのも、ほんのこの頃のことでありました。

つい先頃まで、放課の鐘が鳴りひゞいて、教室の隅々の空気をゆすぶる頃には、心はもう運動場へ飛んで行つてしまつて、この前の放課時間の遊びの續き

を考へるのでした。そして、先生が「では今日はこれだけで……」とおつしやつて禮が済むと、それこそ一散に運動場へ出て行つたものでした。運動場に明るく照つてゐる日ざしも、微笑んでゐるやうに思へました。そして、短かい放課時間を、うつすらと汗かくまでに、この明るい日ざしを、いつばいに受けながら遊び戯れたものでした。

それなのに、この頃はあゝして遊び戯れることが、何となく重苦しい氣持を誘ふのでした。皆と遊びながら、心はいつも皆の氣持どほりに動きませんでした。たま／＼笑つても、自分ながら、その笑聲がまるで洞穴へびゞき返す音のやうに聞えました。そして、笑ふ時には、自分の顔に厚ぼつたく糊でもついてゐるやうで、硬ばつた笑になつてゐるやうな氣持がしました。

そんな時の淋しさ。それこそ、まるでする／＼と、深い深い井戸に、引きす

り込まれるやうで、追ひ拂ひ、遠退けようと思つても、どうにもならず、ぐん／＼と胸に淋しさは喰ひ込んで來るのでした。

しぜん、皆と遊ぶのが、おつくうになり初めました。皆から離れて、運動場の隅に、黙つて立ち盡してゐる方が、ずつと自分の氣持が樂でした。

運動場の隅には、名も知れない雑草が、じめじめした土から、小さな青い頭をもたげてゐました。徳子さんは、ちつとこの雑草を見てゐると、いつもきつと眼がしらが、熱くなつて來るのでした。はかない雑草の心——といふやうなことも、考へられて來るのでした。また、その運動場の隅に立つてゐると、教室の軒かげに、蜘蛛の巣が懸つてゐるのが見えました。そして黒い蜘蛛が、巢のはじつこに、ちつと身をひそめて餌のかゝるのを待つてゐました。この蜘蛛の心といふやうなことも、考へずにはゐられませんでした。雑草も蜘蛛も、誰

からも厭がられ、憎まれるものであるだけに、妙に徳子さんの淋しい心には、同情を煮くのでありました。

日の暮れ方に

空見れば

いつもはかない

ことばかり

すすきをばなは

穂に咲けど

秋の花ゆる

さびしかる

戀は捨てても

空見れば

思ひ出されて

さびしかる

——詩集「別後」から——

かうした詩を、別に深く意味を考へるでもなく、たゞ自分の思ふまゝに、口ずさんだりして、一篇のこの詩の底に、うつすらと流れてゐる淋しさに、自分の心を溶かし込んでしまふのも、徳子さんにとつては、淋しさを却つて、慰さ

めることでありました。

こんなふうにして、徳子さんにとつては、この運動場の隅は、忘れがたい場所になつてしまひました。殊にこの場所は、誰にも氣づかれない場所なので、「徳子さんどうしたの。」とか、「徳子さん遊びませうよ。」なぞと、皆から聲をかけられないだけでも、どんなにか安らかない淋難所だつたでせう。春は來ましたが、要するに徳子さんは、春の明るさ樂しさに眼をふさいで、春の暗い淋しさを、わざ／＼探し求めるやうな心になつてゐました。

ある日、徳子さんは、科學者が分拆をするやうに、自分の淋しさを問題にして、深く考へて見ました。また、何が故の淋しさだらうかと、追究してもみました。けれど、淋しさそのものを、つきとめることは出來ませんでした。

それは、たゞ何とはなしの淋しさ、言葉には云ひ表せない淋しさで、恰かも

青白い月光をまん／＼と受けて、忍び泣くやうな音をたて、流れてゐる小川、または、狭霧の中にちつと眼をつむつたまゝ、道のほとりの樹に頭を垂れてつながれてゐる馬、そんなものを見る時に、ふと心の面を掠めて通る影のやうなひつそりした氣持。さうした氣持のやうでもありません。

また、その淋しさは、子供の時に、遊び疲れて歸つて來ると、家の中が妙にしいんとしてゐて、「お母さま、只今。」と云つても、誰一人として返事をするでもなく、薄暗い影が、家の中に溜つてゐるのが、まともに心の中へ流れ込んで來るやうに思へる時の、あの置いてきぼりにされたやうな氣持にも似てゐました。

それからまた、病氣の時にうつらくと床の中で眠り、ふと眼ざめると夕日が、あかくと障子に射して、あたりには藥の匂が高く、そして、先刻ほど眠

りかける時に、いつまでも枕元にゐて下さると約束なすつたお母さまが、臺所で立ち働いていらつしやるのを知つた時の、あの継りどころのないやうな氣持さうした氣持にも似てゐました。

とにかく、自分でははつきりと、こんな氣持だとは云へませんが、それは決して暗い夜道を歩く時に、怖い淋しい氣持になる、あの淋しさとは、ずつとずつと異つたものだといふことだけは、はつきり云へるやうに思ひました。

「ほんとに、どうおしなのだえ、何か心配ごとでもあるのかい。」

その日、そんなふうには、あれこれと淋しさのことを考へて歸つたせいはいつもよりも餘計に鬱いでゐるやうに見えたのでせう、お母さまは眉を寄せて、心配さうに徳子さんに向つてお訊きになりました。

「だつて、この頃あたし淋しいんですもの。」

「さう。」と云つて、お母さまは、徳子さんをぢつと見つめていらつしやいました。

徳子さんは吐られるのかと思ひました。それほど、お母さまはしみぐと見つめていらつしやいました。

「お母さま、お氣にさはりましたの。御免下さいませ。」

その時でした。お母さまのお眼は急にうるんで、ほろ／＼と涙が、その美しい頬のうへを傳ひました。

「いゝえ。氣にさはつたりするものですか。お母さまは、あなたが淋しがつてゐる氣持が、よく解るものだから、つい可哀さうになつてね……」

「まあ、お母さま。」

徳子さんは、思はずさう叫んで、お母さまのお胸に継りついて、顔を埋めた

まゝ、泣いてしまひました。泣いてゐる間、お母さまのやさしいお手が、絶えず頭髪を撫でさすつていらつしやるのを、はつきりと意識しました。それは、ほんとに何て嬉しい氣持だつたでせう。

まるで幼ない子のやうに、お母さまのお胸を自分のものに、することが出来ました。子供の時に、かうしてお母さまのお胸に縋りついて、温かい夢を與へて貰つたことを、十七にもなつて、かうして再びなし得ようとは、ほんとに思ひも寄らないことでした。をりをりは、遠い／＼昔のこととして、色褪せた思ひ出の墓の下から、掘り起して思ひ出すこともあつた記憶でしたが、とてもも願つても叶へられさうにもないこととして、あきらめてゐただけに、今かうしてお母さまのお胸に顔をあてゝゐると、その嬉しいさのために、だん／＼と昂奮も抑へられてゆきましたし、いつも胸に巢をくつてゐる淋しさも、今はどこ

ともなく消えてしまつたやうな氣がしました。

徳子さんは、やがて泣き止めて、お母さまのお顔を、そつと見あげました。お母さまは眼ざとく、徳子さんが顔をあげたのにお氣づきになつて、

「ね、これから淋しい時には、お母さまとお話ししませうね。」と、おつしやいました。

「お母さま、ほんとにあたしは、幸福ですわ。お母さまみたいな方を、お母さまにすることが出来て……」

「まあ、こんなお母さまで？」と、お母さまは微笑みながら、おつしやいました。でも、暫くしてから、お母さまは眞顔になつて、しみ／＼した口調で、

「でもね、あたしがやつぱり、あなたぐらゐな時は、ゐても立つてもゐられぬほど、何だか淋しくて淋しくて……」と、おつしやいました。

徳子さんは、やつぱり自分と同じやうに、お母さまも昔は、淋しかつたことが、おありになつたのかと思ふと、何とも云はれぬ慰めを得たやうな気がしました。何等の隔てもなく、お母さまの心と、ぴつたり一しよになつたやうな気がしました。

逃れんすべなし

せめては小刀をあげて

この青き柚の實を截れ

さらばうちに黄金の

句はしき十二の房ありて

爾とわれとを防らむ

——詩集「静かなる眉」から——

徳子さんは、この詩のことを思ひ出しました。これは美しい詩人の空想であるかも知れぬが、拂つても拂つても追つて来る淋しさに押しつめられて、逃れるすべがなくなつても、自分には美しいお母さまの胸があると思ふと、ずるぶるん心強く思へました。

さう思ひながら、徳子さんは眼をあげて、庭の方を見ました。春の日ざしは踊り子の靴の、黄金の飾りのやうに光り、庭の片隅の花園の花は、とりどりの美しさを見せながら、めい／＼の夢をもつれ合してゐるやうでした。やゝ紫色を帯びてゐるのではないかしらと、怪しまれるほどに庭の土は、いつになく美しうございました。ゆるやかに飛んでゐる虻や蜂の羽根も、光を碎きながら

きれいな光になつてゐました。

「なんて、美しい春なんぞでせう！」

徳子さんは、淋しさを忘れて、はじめてつくぐと春が来たことを感じました。

その翌る日から、徳子さんは、また快活になつて、運動場に出ても、遊び戯れてゐました。もはや運動場の隅を、憧れるやうなことはありませんでした。家にゐてもいそぐと、さも嬉しさうに見えました。もちろん、徳子さんの胸に巢を喰つてゐた淋しさがなくなつて、その後、明るい楽しい春か、ちよこんと入り込んで来たためであるのは、云ふまでもないことです。

また、徳子さんとしては、お母さまの胸に縋つて泣いたその日、救はれたや

うに軽くなつた氣持で庭を眺めた時ほど、しみぐと春そのものを、身に近く感じたことはない、何かの話の場合には、よく徳子さんはそのことを話し出しました。

水谷さまる著作

森	對	詩	青	寶
の	話	物	み	石
子			ゆ	の
			く	夢
鳩	集	語	月	(詩集)
(童話集)			(詩集)	
近	近	既	既	既
刊	刊	刊	刊	刊

版權	
不	許
有	所
復	製
詩物語	
定價 金一圓五十錢	

<p>大正十一年五月廿五日發行</p> <p>大正十一年五月廿五日發行</p>	<p>著者 水谷勝</p> <p>發行者 飯尾謙藏</p> <p>發行所 東京市神田區南神保町十六番地 交蘭社</p> <p>發賣所 東京市神田區南神保町十六番地 尙文堂書店</p> <p>振替東京一九三四 電話九段一七五四</p>
---	--

(所版活幸美精 地番一一日丁一町代土美區田神市京東 所印)

157
85

終